

# 東京大学史史料室ニュース

第39号 2007・11・30

## 目 次

「四高開学120周年記念展示－学都金沢と第四高等学校の軌跡－」開催を通して .....	2
東西両帝国大学対抗運動週間の実施について－大学史像の探求－ .....	3
受贈図書一覧 .....	6
史料室日誌抄録 .....	8



### 井上哲次郎旧蔵書簡

2007年7月、古書店より谷本室員が入手し、大学史史料室に提供した史料群。  
井上哲次郎(1855～1944年)の旧蔵書簡60点である。

# 「四高開学120周年記念展示 一学都金沢と第四高等学校の軌跡一」 開催を通して

堀井美里

## はじめに

昭和24年(1949)5月、新制国立金沢大学発足にあたり、旧制の第四高等学校、石川師範学校、石川青年師範学校、金沢高等師範学校、金沢医科大学、同大学附属薬学専門部、金沢工業専門学校の石川県内各高等教育機関が母体となった。このうち、法・文・経済・理学部の前身となった第四高等学校(以下四高)は、明治19年(1886)の中学校令に始まる地元の熱心な誘致運動の結果設立され、以後昭和25年の閉校まで金沢の街の中心地に存在した。昨年平成18年(2006)の四高開学120年を機に、金沢では、同窓会による記念行事のほか、明治時代以降四高を中心として展開した「学都金沢」の歴史を見直し、現在そして未来の街の姿を考える関連事業が企画・実行された。金沢大学も同窓会と連携し、大学フィルハーモニー管弦楽団・同合唱団の演奏による「交響詩「北の都」演奏会」などを開催した。

この一環として、10月16日から29日、資料館・附属図書館共催の「四高開学120周年記念展示一学都金沢と第四高等学校の軌跡一」が行われた。本稿は、この展示の企画・運営に携わった経験から、開催の経緯と趣旨、展示の成果と問題点を整理し、本展示を契機として明らかとなった今後の課題について、私見を述べたものである。なお、展示の内容については、同展示図録、金沢大学附属図書館報「こだま」第161号、「金沢大学資料館だより」第29号に詳しいのでそちらを参照していただきたい。

## 1. 開催の経緯と展示の趣旨

5月初旬、隔年秋に行う資料館・附属図書館共催特別展のテーマを、10月22日に行われる「四高開学120年祭全国大会」に合わせて、四高開学120年記念とすることが決定した。両館職員によるワーキンググループ(以下WG)が結成され、展示とシンポジウムの開催が企画された。その後、協議を重ね、テーマ別の展示構成や、シンポジウムの内容一四高と市民とのつながりを振り返り、現在の本学と地域との関係の見直しを提言する一などが決まった。同時に、四高同窓会をはじめとする学内外への協力依頼と資料調査も開始した。

ところが、この段階で、民間企業の都市開発マネジメント研究所によるまちづくり運動「かなざわ・まち博」(以下まち博)でも同様の企画を進めていることが分かった。まち博との話し合いの結果、展示を金沢大学とまち博の共催とすること、会場を金沢大学資料館と石川近代文学館(旧四高校舍)の2会場とすること、シンポジウムはまち博の主催とすることで合意した。これが6月末日のことである。この時から、ようやく本格的な展示の準備に入ることができた。

同時に、展示の趣旨もほぼ定まってきた。まず第一に、すでに歴史的存在となりつつある四高自体を現在の学生や市民に知ってもらうこと。そのため、展示内容として、歴史や人物を取り上げるほか、学生生活や部活動、教育など現在と共通する切り口を設定した。第二に、金沢という街や市民と四高との結びつきを理解してもらうため、創設時の地元の熱心な誘致運動や、「学都金沢」の中核的存在として市民に「四高の生徒さん」と愛された姿を紹介できるよう心がけた。

これらの趣旨の背景には、展示を含めた記念事業を通じて、金沢大学が四高の歴史や伝統、精神、文化を継承する存在であることを学内外に明確に示すという大学の意思が存在した。この一連の動きとして、8月28日、金沢大学と前身校及びそれらの同窓会、同窓生を結び「金沢大学の発展と社会への貢献を図るとともに単位同窓会相互の交流、親睦等」を目的とする金沢大学同窓会連絡協議会が発足している。学内外、とくに現在の金沢大学関係者や前身校同窓生の中に、「前身校から金沢大学へ」という共通認識を形成していくことが、この記念事業の目的の一つであった。またさらに、今回の趣旨には、四高と地域社会とのつながりに注目することで、金沢大学の基本理念である「地域に開かれた大学」が、前身校以来の歴史を持つことを理解し、改めて現在・未来の大学と地域社会との関わりについて考える機会を提供したいという期待も込められていた。

## 2. 展示の成果と問題点

展示の成果として、まず事前調査、展示公開により資料や事実について新たな発見があったことが挙げられる。事前調査では、時間的制約もあり改めて大々的な資料調査を行うことは難しく、『第四高等学校関係資料リスト』(1999 金沢大学50年史編纂室)や資料館・附属図書館の資料・蔵書目録、四高同窓会作成の資料リストを基本とし、四高同窓生である資料館客員研究員や学内教員の協力の範囲内で、既存のリストに記載されていない資料を調査した。この結果、市民から寄贈されたエンサイクロペディア・ブリタニカと書棚、四高物理科教授が所有していた江戸後期のものと推定される渾天儀、作家井上靖の成績表など、今回が初公開となるいくつかの資料を展示することができた。また、開催期間中に来場した同窓生からは、在学当時の話や、展示資料に関する貴重な意見、資料の寄贈を受けた。その中に、戦後まもない四高生の歌声が吹き込まれた音源(原資料はレコード。寄贈品は複製のCD)があり、展示期間中、会場内のBGMとして使用することができた。当時の四高生の歌声は、後に同窓生が吹き込んだものよりもテンポが速く勢いがあり、新鮮な驚きを感じた。なお、展示後の資料寄贈に

については後で触れる。

今回の展示では、いくつか初の試みが行われた。そのうち主なものとして、民間機関であるまち博との共催、2会場同時開催がある。まち博とは、現在ある街の歴史や伝統、文化などの資源を活用して市民による街づくりを目指す企画で、地域の産官学の諸機関が様々な形で関わっている。本展示では、このまち博の特別企画「学都の心を再び」と連動したことで、地元新聞への大々的な報道やテレビ・ラジオの取材などの広報が充実し、四高・金沢大学関係者以外の一般市民の来場者が増加した。また、会場を郊外の大学資料館に加え、街中の旧四高校舎であった近代文学館としたことも来場者の増加につながった。そして何より、街づくりを勧める地域の民間機関との連携は、地域社会へ開かれた大学をめざす本学にとって、貴重な経験となったと思われる。

しかし、こうした新しい試みの中ではいくつかの問題も発生した。最大の問題は、企画が当初の予定から漸次変化、拡大していったため、従来の特別展WGの組織や人数では対応しきれなくなり、展示準備が遅れがちになったことである。その影響をとくに受けたのが資料調査・研究で、展示の根幹の作業であるにもかかわらず十分な時間が不足し、展示内容の質に関わる結果となってしまった。また、研究・教育機関としての大学の財産－人材や研究の蓄積－を十分に生かしきれなかったことも問題である。今後の展示では、大学の名を冠して行う以上、その蓄積された資産を十分に活用できる体制作りが必須であろう。

#### おわりに～今後の課題

今回の展示を契機として生じた最も重要な課題は、

現在同窓会が所蔵・管理している四高関係資料と、今後同窓生から寄贈される資料を、きちんと保管・活用していく体制を整えることである。それは、四高の歴史を引き継ぐ意思表示をした金沢大学の責務である。

現在、同窓生自身による四高資料を保存する有志の会が発足し、個人が所有している四高関係資料の寄贈を募っている。その活動の中で、資料館は、同会に寄贈された資料を保存・管理し、活用していく役割を負っている。しかし、今後同窓生の高齢化が進むことを考えれば、この資料寄贈、受け入れの過程をダイレクトに大学へ結び付ける仕組みの構築が望ましい。

一方、同窓会が管理・所蔵している四高関係資料については、その保存場所である石川近代文学館（旧四高校舎）が平成20年春「四高記念文化交流館」（仮称）としてリニューアルオープンすることが決まったため、県によるリニューアル工事の間（平成19年10月～同20年3月）の資料の保管が早速問題となった。これについて、同窓会、県、大学で協議の結果、大学が学内に収蔵スペースを確保し、保管することが決定。8月より順次資料の搬送が行われた。今後、資料整理や総合的な目録の作成、リニューアルオープン後の四高記念館ゾーンの展示企画などは、おそらく大学と同窓会が県の協力を得て進めていくことになるだろう。そのためには、長期的な収蔵場所や予算の確保と、なによりも資料保存・管理の知識と技術を持ち、調査・研究を行いその成果を学内外に還元することのできる人材の育成が課題であろう。この課題にどう取り組んでいくかは、単に四高資料保存の問題だけでなく、大学の地域や社会、そして過去の歴史に対する真摯な姿勢が問われていると思うのである。

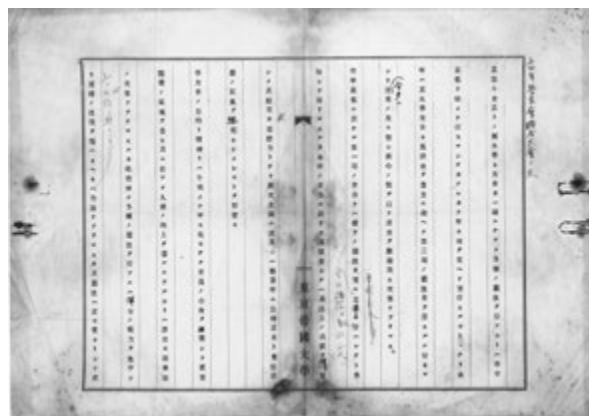
（ほりい みさと：金沢大学資料館）

## 東西両帝国大学対抗運動週間の実施について —大学史像の探究—

谷本宗生

2007年3月、東京大学史史料室に所蔵されている、第10代東京帝国大学総長（1920～1928年）を務めた古在由直（1864～1934年）の関係史料を目録化した『古在由直史料目録』を発行した。古在総長は、本学にとって関東大震災以降の大学復興と発展に尽力した人物であった。古在の史料は、足尾銅山鉍毒事件関係41点、東京帝国大学・農商務省関係110点、執筆論文・講演原稿32点、草稿類49点、書簡295点、駒場農学校在籍・独逸留学時の研究ノート8点、写真17点など、総計610点ある。古在総長の関係史料を整理するなかで、「〔大正〕十四年学友会聯合大会ノ文」（整理番号113）という、東京帝国大学の原稿用紙2枚に記された、第2回東西両帝国大学対抗運動週間に際しての演説草稿が目にとまった。「京都ト東京トノ両大学々友会カ一緒ニナツテ各種ノ競技ヲ行フコトハ昨年京都テ始メテ行ヒマシタカソレカラ年々地ヲ更ヘテ実行スルコト、ナリ本年ハ京〔都〕大学〔々〕友会々員諸君ヲ当方ニ迎ヘテ第二回ノ競技会ヲ催スルニ付キ

マシテ今夕ハ遠来ノ友ニ対シ衷心ノ悦ヲ以テ諸君ヲ歓迎致ス次第デアリマス。…」



「〔大正〕十四年学友会聯合大会ノ文」



東西両帝国大学の対抗運動週間については、『東京大学百年史』資料3（1986年）の巻末に記されている「年表」にもいっさい史実の記載がなく、今回の史料との出会いから「運動週間」の概要を初めて理解することができた。本学のライバル校であった京大側では、『京都大学百年史』資料編3（2001年）や『同上書』総説編（1998年）のなかに、簡略ながら大学対抗運動週間に関する記述がみられる。「1924（大正13）年10月23日 東大・京大各運動部の対抗競技会を5日間京都で集中的に開催（初の「運動週間」）。以後、京都・東京交互に開催。1925年から期間中は授業中止となる。」（資料編3、789頁）。「大正13（1924）年10月、画期的な全学あげて参加する運動週間を設け、休講にして、3日の日程で第1回東西両帝国大学対抗競技（東西学友会連合大会）が本学〔京大〕を会場に開催され、野球・柔道・弓道・庭球・剣道・陸上の6種目を競い、京大が4勝2敗で勝った。第2回は東大に240名の選手を送り込み、新しく、馬術・水泳・ア式蹴球・ラグビーを加え戦ったが、3勝5敗1引き分けに、第3回も、5勝7敗に終わった。この会の特徴は、運動競技だけでなく、第1回以来、会期中に両大学の音楽部の合同演奏会が行われることで、第2回にはハイドンの第6シンフォニーが瀬戸口藤吉の指揮で、第3回には、世界的に有名な京大音楽部常任指揮者エマヌエル・メッテルの指揮により、序曲エグモンド、未完成交響曲が演奏され人気を呼んだ。第3回からは、合同美術展も加わり、講演会も復活した。」（総説編、1126～1127頁）。帝国大学史のなかでも、東西両帝国大学の対抗運動週間に関しては、十分明らかにされている出来事<周知の事実>とはいえないであろう。いったい、どのようにして開始された試みであったのか、それはいつ頃まで行われたものであったのか、実際に、運動週間は大学でどのように扱われたのかなど、いまだ不明な点も多い。今回、現存する関係史料の『帝国大学新聞』や『京都帝国大学新聞』等を用いて、可能な限り究明してみたいと思う。

まず、『帝国大学新聞』第60号（大正12年12月11日）の3面に、「学友会各部合同して大学京都へ遠征せん 目下東大より京大へ交渉中 明年秋より実現か」という記事が掲載されている。学友会各部の対抗競技を、大学として合同で「一斉」実施することが歴史上画期的な試みであったと思われる。東大側から、京大側へこの計画を申し込んで合意された点も注目される。『帝国大学新聞』第64号（大正13年1月26日）の3面には、「総長も大乘気の両大学対抗競技」という記事が掲載されている。「学友会各部の連絡融合と均一的発達を期する為め、東西両大学の各種の対抗競技並に合同演説会、演奏会を一纏めにして挙行する計画が東大の常務委員会から発議され京大の委員会も双手をあげて賛成の結果昨年十二月京大委員三名が学生監事務官と共に打合せの為め上京せる事は本紙既報の通りなるが其後京大側委員は帰洛して協議を重ね時期としては大体天長節前後を第一回は京都にて行ふ事を希望する事に申し合せた…此の未曾有の対抗試合には両大学総長は非常な乗気で大優賞杯を贈つて奨励すると言ふ事である、なほ九州帝国大学からも参加を希

望して来て居ると言ふ」

第1回の大学対抗運動週間については、『帝国大学新聞』第92号（大正13年10月24日）の2面で、10月24～26日の3日間吉田原頭で開催される旨、1頁を割いて報道されている。古在東大総長や荒木京大総長の談話に加え、「東西両大学の運動競技大会が京都に於て催されることは私どもの大きな喜びです、京都市民は此度此素晴らしい催しに対して満腔の熱誠を捧げることでせう…両大学の競技が終始美しいスポーツマンの精神に依つて飾られ一般競技界に範を垂れると同時に京都市民の精神の上にも良い影響を與へられるやう衷心から祈る次第です」という京都市長代理の多久安信の談話も掲載している。第1回の両軍戦績は、次のとおりであった。野球：2 - 1（東大勝）、柔道：大将を残し（京大勝）、弓道：107 - 103（京大勝）、庭球：9 - 2（東大勝）、剣道：18 - 6（京大勝）、陸上競技：55.5 - 46.5（京大勝）。『帝国大学新聞』第93号（大正13年10月31日）では、全2面にわたってその熱戦結果を報道し、「両帝大提携の端緒を慶ぶ」「精神的効果は何よりの収穫」という西山東大学生監と花田京大学生監の談話が掲載されている。同号2面には、次のような「観戦余談」も記されている。「一日の戦が終つてやがて来る、あちらの宿、こちらの宿からも角帽が出て来る、そして集るところは京極から四條にかけてである やがて夜も更ける あちらのカフェー、こちらの料理屋からも角帽が出て来る…まあ何と云ふ賑やかなことよ」

第2回の運動週間は、1925（大正14）年10月16～20日、東京で開催された。これに際して、帝国大学新聞社は「先輩学生諸君にその経過詳細を速報」するため、10月15日、17日、18日、19日、20日の5日間、毎日2万部を増刷発行して大学新聞を配信した。京大側でも、臨時号として『京都帝国大学新聞』第11号（大正14年10月22日）を発行して、熱戦の模様を6面にわたって報道している。第2回の競技成績は、次のとおりであった。馬術：30 - 38（東大勝）、水泳：45 - 68（東大勝）、弓道：103 - 101（京大勝）、柔道：大将を残し（京大勝）、ア式蹴球：1 - 1（引分）、陸上競技：44 - 58（東大勝）、庭球（複）：0 - 4（東大勝）、剣道：1 - 13（東大勝）、庭球（単）：0 - 7（東大勝）、野球：2 - 4 Δ（東大勝）。この運動週間に際して、京大では14～20日まで休業としている。いっぽう、東大では19日（月曜日）のみ1日を休みとしている。これについて、鳩山東大新聞部長は「尚希望することは此催しが両大学に依りて公的に認められて欲しいと言ふことである。即ち現在のままの制度では、此催しに際して、これに関係する選手とかマネジャーとかは勿論一般学生も多大な犠牲を携はねばならぬのは誠に遺憾である。これが公的に認められて、換言すれば此週間を両大学に於て公式に休業し、爽快明澄な仲秋の一週日を、スポーツに学業に、のんびりとした気持で、而も澁漉たる青春の意気を持つて愉快にエンジョイされることを私は希望して止まない」（『帝国大学新聞』第135号、大正14年10月15日、1面）と述べている。京大側では、この運動週間の休業是非をめぐる各教員の意見を大学新聞で公表してい

る。「大学の職員及学生生徒は原則としては誰もが、運動遊戯をするか、或は他大学に遠征又は応援に出掛けるか或は茸狩又は遠足をするといふものか、兎も角もこの週間は可成研究室や事務室に這入りつこなし」（松原厚）など、運動週間の休業に関して肯定的な意見が多いなか、「競技の為に授業を休止することは不可なり。強て遠出の競技を遂げなければ春季休業又は冬期休業を利用せられたし。」（大塚要）や「運動週間を学期の中間に置くことには不賛成、之を夏期休業の始に置かれんことを希望す。」（鈴木虎雄）などの意見も一部みられた（『京都帝国大学新聞』第11号、1面）。さらに、「此の如き運動週間を設けるために授業に対する責任者に予め相談しなかつた事は当事者の失態である。…若し教授中に一人でも反対者があつた場合には大学の性質として此の如き週間を現在の如き形に設ける事は適当でないと思ふ。」（松山基範）といった大学運営の本質に迫る意見もあがった（同上号、6面）。

第3回の運動週間は、1926（大正15）年9月26～10月19日、京都で開催された。第3回の競技成績は、次のとおりであった。水泳：61 - 52（東大勝）、馬術：京大勝、陸上競技：54 - 48（京大勝）、庭球（複）：3 - 1（京大勝）、柔道：不戦5人（京大勝）、卓球（オープン）：東大勝、庭球（単）：5 - 2（東大勝）、弓道：120 - 104（東大勝）、野球：7 A - 0（東大勝）、剣道：14 - 12（京大勝）、藍球（オープン）：東大勝、ホッケー（オープン）：東大勝。京大では、10月15～20日の間授業が休止されている。いっぽう東大では、9月28日の評議会で、京都で開催される第3回の運動週間に際し、本学参加選手及び応援学生らの希望として、16、18、19日の3日間臨時休業してほしいという陳情が議論された。賛成意見、反対意見が評議員からあがって、賛否が決定しないために、学部長会議に一任される（『東京大学百年史』通史2、1985年、299頁）。10月12日の評議会では、18、19日の両日、運動週間に伴う臨時休業と認める学部長会議の内定が報告されている。

東西両帝国大学対抗運動週間は、第3回をもって大学制度としては終了することになった。『京都帝国大学新聞』第56号（昭和2年7月1日）の3面では、「東大側の都合で運動週間遂に廃止」として、「今秋には両大学学友会を通じてではなくて各部対部試合が東京に於てなされる事となる…」と掲載されている。京大側では、従前一定期間休業していたが、各部の対抗試合（定期戦）が実施されるにあたって、大学全体

として授業を休まない方針を打ち出した。『京都帝国大学新聞』第61号（昭和2年10月21日）では、「対東大戦グラフィック」（3面）、「[各部] 対東大戦」（4～5面）として、運動週間に代わって東京で開催された各部の対抗試合の熱戦が報道されている。そもそも、東大側から切り出して実施された運動週間は、わずか3回の歴史（3年）で廃止されることになったが、廃止に至る事情・背景については『帝国大学新聞』第211号（昭和2年5月30日）の5面に、「運動週間がシーズンの異なる各種の競技を一定の時間を費して行ふことは運動そのものの性質からいつてもレコード向上の上からいつても無意義の事であるとして各部のうちに反対するものあり、又学友会経費不足の折にこのために特に多大の費用を投ずるは学友会として無意義であると主張するもの多」いからであると記されている。その後も、運動部は全学生によって組織された「学友会」の在り方に対して不満を募らせ、1928（昭和3）年2月、学友会からの脱退を表明する。翌3月、運動部と学生委員会の調停が不首尾に終わり、学友会は解散を決議した。学友会の解散にあたり、学友会組織の運営に総長として尽力し、運動週間の実施も後押しした古在の心情について、「折角自分で苦勞して育てあげて来た学友会を壊すなど大変淋しい気持ちだつたらう」（東龍太郎教授談「意味深い後押し『無茶するな』」）と、『帝国大学新聞』第534号（昭和9年6月25日、2面）には記されている。

『東京大学百年史』通史2の「学友会・運動会・五月祭」の項目では、「運動週間」の実施について記載はないが、来るべき『東京大学百五十年史』の編纂では取り上げるべき重要な項目であろう。東京大学は、1877年の創立以来130周年を迎えた。『東京帝国大学五十年史』（1932年）、『東京大学百年史』（1984～1987年）と、全学的な大学史編纂が半世紀ごとの節目に行われてきた変遷をみれば、おそらくは20年後に『東京大学百五十年史』が編纂される可能性は高い。いまから創立150周年へ向けて、本学として少しずつでも大学関係史料の収集と整理を着実に進めていかなければならない。自らの歴史を自らの手で紡ぎ、それをしっかり次世代にも継承していくこと。恒常的に、学問の府たる大学史像を探究していく姿勢をこれからも堅持していきたい。大学史像とは、新たな史料の発見やさまざまな学術研究知見の進展によって、つねに修正し続けるものであり、その繰り返しこそ「大学史」（大学史のダイナミズム）を物語っている。

（たにもと むねお：大学史料室）

## 受贈図書一覧（抄）（平成19年2月～平成19年9月）

沼津市明治史料館通信 第85～88号	平成18年4月～	一高同窓会会報 第390～393号	
沼津市明治史料館	平成19年1月	一高同窓会	平成19年2月～8月
大学アーカイヴズ No.36		東京大学構内遺跡調査研究年報 5	
全国大学史資料協議会東日本部会	平成19年3月	東京大学埋蔵文化調査室	平成18年3月
江戸東京博物館NEWS vol.57,58		東京大学東洋文化研究所要覧 2007	
東京都江戸東京博物館	平成19年3月,6月	東京大学東洋文化研究所	平成19年7月
立命館大学国際平和ミュージアムだより VOL.14-3		佐佐木信綱記念館だより 第21号	
立命館大学国際平和ミュージアム	平成19年3月	佐佐木信綱記念館	平成19年3月
霞城館だより No.44		緑丘アーカイヴズ 第5号	
霞城館	平成19年7月	小樽商科大学百年史編纂室	平成19年3月
野間研だより No.21		開館10周年記念小杉放菴展（ポスター・チラシ）	
野間教育研究所	平成19年3月	小杉放菴記念日光美術館	
開港のひろば 第96,97号		神戸大学史・特別展キャンパスの変遷にみる神戸大学史（ポスター）	
横浜開港資料館	平成19年4月,8月	神戸大学百年史編集室	平成19年度
Ouroboros 第31号		一高同窓会総会-資料-第3回	
東京大学総合研究博物館	平成19年5月	一高同窓会	
コリゲ No.40		啐啄 第43,44号	
広島大学高等教育研究開発センター	平成19年4月	日本の教育改革を進める会	平成19年3月,8月
関東学院学院史資料室ニュース・レター 第10号		東北大学創立百周年記念展東北大生の一世紀（ポスター）	
関東学院学院史資料室	平成19年4月	東北大学史料館	
九州大学大学文書館ニュース 第28,29号	平成18年9月,	池田文書の研究 東大医学部初代総理池田謙斎 下	
九州大学大学文書館	平成19年3月	池田文書研究会	平成19年2月
金沢大学資料館だより 第28,29号	平成18年12月,	東光 第57,58号	平成18年9月,
金沢大学資料館	平成19年3月	東京高等学校同窓会	平成19年9月
東北大学史料館だより 第6号		立命館百年史 資料二	
東北大学史料館	平成19年3月	立命館大学百年史編纂室	平成19年7月
大学史資料室ニュース 第11号		第三十回一化会記念誌 現場を知り尽くした者が語る 化学史 その黄金時代	
大坂市立大学大学史資料室	平成19年3月	一高同窓会	平成18年9月
名古屋大学大学文書資料室ニュース 第21,22号	平成18年9月,	第二次世界大戦中の科学動員と学術研究会議の研究班（抜刷）	
名古屋大学大学文書資料室	平成19年3月	青木 洋（横浜国立大学経営学部）	平成18年9月
龍谷大学史報 vol.7		2006成蹊学園史料館特別講演会 成蹊気象観測所の80年（チラシ）	
龍谷大学大学史資料室	平成19年3月	成蹊学園史料館	
京都大学大学文書館だより 第12号		幕末・明治初期数学者群像（下）明治初期編	
京都大学大学文書館	平成19年4月	谷本宗生	平成3年7月
校史 Vol.19		復刻版 京都大学新聞 第7～9巻,記事・執筆者索引	
國學院大学校史資料課	平成19年3月	船橋 治（不二出版）	昭和61年7月
1880年代教育史研究会ニューズレター 第18号		矢澤梅太郎の日記（抜刷）	
谷本宗生	平成19年6月	田崎哲郎（愛知大学文学部）	平成19年3月
2007年度春季展荒ぶる魂-大西鐵之祐と早稲田ラグビー（図録）		回想-山辺武郎先生と電気透析研究会-	
早稲田大学大学史資料センター	平成19年3月	山辺昌彦（わだつみのこえ記念館）	平成18年9月
東京大学理学系研究科・理学部ニュース 38巻6号～39巻3号		名古屋藩留学生・鬼頭佐太郎のドイツ留学（抜刷）	
東京大学大学院理学系研究科	平成19年3月～9月	加藤詔士（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）	平成19年3月
東京大学埋蔵文化財調査室調査報告書 7		日本近代化のなかのお雇い教師W.K.バルトン（抜刷）	
東京大学埋蔵文化財調査室	平成18年3月	加藤詔士	平成18年12月
アーカイヴズ・ニューズレター No.6		お雇い教師ヘンリー・ダイアーの著作（抜刷）	
国文学研究資料館	平成19年3月	加藤詔士	平成18年12月
東北大学百年史 七 部局史四		ニューズレター明治大学史 vol.2	
東北大学	平成18年12月	明治大学史資料センター事務室	平成19年3月
拓殖大学百年史 資料編五		書画展 北條秀司をめぐる人びと（ポスター・チラシ）	
拓殖大学	平成19年5月	東海大学学園史資料センター	
慶應義塾福澤研究センター通信 第6号		戦前文部省の治安機能-「思想統制」から「教学錬成」へ	
慶應義塾福澤研究センター	平成19年3月	荻野富士夫（小樽商科大学商学部）	平成19年7月



明治国家と近代的土地所有 奥田晴樹（金沢大学教育学部） 加能地域史 第45号	平成19年4月	名古屋大学 大学文書資料室保存資料目録 第7集 名古屋大学大学文書資料室 名古屋大学大学文書資料室 名古屋大学博物館報告 第22号	平成19年3月 平成19年3月 平成18年12月
奥田晴樹 近代の産業資料（抜刷）	平成19年5月	名古屋大学博物館 アルケイア－記録・情報・歴史－ 第1号	平成19年3月 平成19年3月
奥田晴樹 第一部近代鹿沼の黎明（抜刷）	平成19年3月	南山大学史料室	平成18年12月
奥田晴樹 第二部鹿沼町村自治と地域社会（抜刷）	平成18年3月	日本女子大学史資料集 第十－（一） 日本女子大学成瀬記念館	平成19年3月 平成19年3月
奥田晴樹 平成19年度博士論文 近代日本官立高等教育機関設置の研究 －金沢にみる設置過程を通して－	平成18年3月	成瀬記念館 2006 No.21 日本女子大学成瀬記念館	平成19年3月 平成19年1月
谷本宗生 昭和会館80周年記念 男爵物語 1～3巻 学習院大学史料館	平成19年9月	広島大学文書館紀要 第9号 広島大学文書館	平成19年3月 平成19年3月
小樽商科大学史紀要 創刊号 小樽商科大学百年史編纂室、荻野富士夫	平成19年3月	COE研究シリーズ 20,23,25～30 広島大学高等教育研究開発センター	平成18年9月～ 平成19年3月
神奈川大学史資料集 第二十三集 神奈川大学資料編纂室	平成19年3月	HIGHER EDUCATION RESEARCH in JAPAN Volume 4 広島大学高等教育研究開発センター	平成19年1月 平成19年1月
金沢大学資料館史料叢書 2 金沢大学資料館	平成18年9月	HIGHER EDUCATION FORUM Volume 4 広島大学高等教育研究開発センター	平成19年2月 平成19年2月
四校開学120周年記念展示 学都金沢と第四高等学校の軌跡（図録） 金沢大学資料館	平成18年10月	大学論集 第38集 広島大学高等教育研究開発センター	平成19年3月 平成19年3月
関西学院史紀要 第十三号 関西学院学院史編纂室	平成19年3月	高等教育研究叢書 89～93 広島大学高等教育研究開発センター	平成19年2月～7月 平成19年1月
九州大学大学史料叢書 第15輯 九州大学大学文書館	平成19年3月	21世紀型高等教育システム構築と質的保証－COE最終報告書－第1部（上・下）第2部 広島大学高等教育研究開発センター	平成19年1月 平成19年1月
京都大学大学文書館研究紀要 第5号 京都大学大学文書館	平成19年1月	北海道大学大学文書館年報 第2号 北海道大学大学文書館	平成19年3月 平成19年3月
神戸大学史紀要 第七号 神戸大学百年史編集室	平成19年3月	武蔵学園史年報 第十二号 武蔵学園記念室	平成18年12月 平成18年12月
駒澤大学禅文化歴史博物館蔵書目録 絵画・墨蹟編2 駒澤大学禅文化歴史博物館	平成19年8月	武蔵野美術大学大学史史料集 第四集 武蔵野美術大学大学史史料室	平成19年5月 平成19年5月
駒大史ブックレット 6 駒澤大学禅文化歴史博物館	平成19年3月	大学史紀要 第十一号 明治大学史資料センター	平成19年3月 平成19年3月
成蹊学園史料館資料集 ③ 成蹊学園史料館	平成19年3月	明治大学史資料センター事務室報告 第二十八集 明治大学史資料センター	平成19年3月 平成19年3月
成蹊学園史料館年報 2006年度 通号5号 成蹊学園史料館	平成19年3月	戦後教育史研究 第20号 明星大学戦後教育史研究センター	平成18年12月 平成18年12月
西南学院史紀要 Vol. 2 西南学院	平成19年5月	立命館百年史紀要 第十五号 立命館百年史編纂室	平成19年3月 平成19年3月
玉川大学教育博物館 館報 第4号 玉川大学教育博物館	平成19年3月	立命館平和研究－立命館大学国際平和ミュージアム紀要 第8号 立命館大学国際平和ミュージアム	平成19年3月 平成19年3月
東北大学創立100周年記念展示 東北大学の至宝－資料が語る1世紀－（図録） 東北大学附属図書館	平成19年9月	青淵 第696～703号 渋谷栄一記念財団	平成19年3月～10月 平成19年3月～10月
東北大学史料館紀要 第2号 東北大学史料館	平成19年3月	アーカイブズ 第26～29号 国立公文書館	平成19年1月～7月 平成19年1月～7月
名古屋大学大学文書資料室紀要 第15号 名古屋大学大学文書資料室	平成19年3月	書陵部紀要 第五八号 宮内庁書陵部	平成19年3月 平成19年3月
渋沢研究 第19号 渋沢史料館	平成19年1月	国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇 第3号 国文学研究資料館	平成19年3月 平成19年3月
平成十八年度総長裁量経費プロジェクト『学友会関係資料』 解説・目録	平成19年3月	文書館紀要 第二十号 埼玉県立文書館	平成19年3月 平成19年3月
京都大学大学文書館	平成19年3月	北海道立文書館史料集 第二十二 北海道立文書館	平成19年3月 平成19年3月
		横浜開港資料館紀要 第25号 横浜開港資料館	平成19年3月 平成19年3月

## 史料室日誌抄録（平成 19 年 2 月～平成 19 年 9 月）

- 2月8日(木)～2月10日(土)  
谷本・瀬川室員、史料調査(京都大学大学図書館)。
- 3月15日(木)～3月16日(金)  
『東京大学史史料室ニュース』第38号刊行、発送。
- 3月24日(土) 谷本・瀬川・柏木室員、アーカイヴズ研究会参加(京大会館会議室)。
- 3月28日(水)～3月29日(木)  
『古在由直史料目録』刊行、発送、マイクロ化。
- 4月2日(月)～4月3日(火)  
『東京大学史紀要』第25号刊行、発送。
- 4月5日(木) 谷本室員、個人情報研究会参加(お茶の水女子大)。
- 6月23日(土) 谷本室員、金沢四高会で講演(金沢スカイホテル)。
- 7月14日(土) 谷本室員、全国大学史資料協議会20周年記念座談会参加。
- 7月17日(火) 谷本室員、井上哲次郎書簡60点史料室に提供。
- 7月25日(水)～8月27日(月)  
大講堂改修工事のため、史料室閲覧停止。
- 7月30日(月) 谷本・瀬川室員、アーカイヴズ研究会の運営補助(山上会館会議室)。
- 8月25日(土)～8月26日(日)  
谷本室員、夏期教育セミナー司会(松本市あがたの森文化会館)。
- 9月21日(金) 谷本室員、兵庫県立大学教授齋藤氏他3名の訪問対応。
- 9月28日(金) 谷本室員、学位記授与式(金沢大学にて)。

### この間の閲覧者数

学内者 12名  
学外者 18名

### 主な学外閲覧者所属機関

北京大学、京都大学、お茶の水女子大学、講談社、早稲田大学、鳥取県立図書館、NHK エデュケーショナル、不二出版

### その他

文献撮影・複写許可件数 24件  
調査(照会)件数 52件

題字 森 巨元総長

東京大学史史料室ニュース 第39号

発行日：2007年11月30日（年2回発行）

編集・発行：東京大学史史料室

東京都文京区本郷7-3-1

電話：03(5841)2077(直)

印刷所：株式会社 ワーナー

Archives Section of the University of Tokyo

千葉県稲毛区六方町13-2